随筆

北陸観光列車トラベルダイアリー

―金沢駅四番線の謎―

大野寿子

多くの寝台列車が発着した札幌駅四番線に引き続き、四番線には何かと縁があるようだ。[1] 二〇一五年三月一四日に北陸新幹線が開業して以来、「金沢を旅するなら、春か夏か秋か冬がいいと思います」というキャッチフレーズを掲げた北陸の古都が脚光を浴びている。「Japanese Beauty Hokurikuキャンペーン」[2]の掲げる「美食、美湯、美技、美観、美心」の五つの「美」に心惹かれ、二〇一六年が明けて間もない頃、冬の金沢へと旅立った。とはいえ、目指したものはただ一つ、北陸観光列車乗車三昧の旅である。

能登半島の和倉温泉駅と金沢駅とを約八〇分で結ぶ「花嫁のれん号」は、二〇一五年一〇月にスタートした、JR西日本七尾線とIRいしかわ鉄道線を直通運行する「和と美のおもてなし」をコンセプトとした豪華観光列車である。朱い漆器のような外観は輪島塗と金箔装飾と加賀友禅を、ヘッドマーク（ロゴ）は加賀水引をコンセプトにデザインされている（**図1**）**図2**）。さて、一〇時一五分に金沢駅四番線から発車する「花嫁のれん一号」に乗車すべく、「三、四、五番線」と表示されているホームへの階段を上り終えた私は、一瞬目を疑った。四番ホームがない！三番ホームのすぐ隣が五番ホームなのだ。四は死を連想させるという、縁起を担ぐ風習か？それとも『ハリー・ポッター』シリーズの「九と四分の三番線」さながら、壁を通り抜けていくホームなのか？そんな空想力豊かな乗客のための道しるべは、「四番線は前方八〇メートル」。つまり三番と五番が隣接するホームの最果てに、特別四番ホームがあるというのである。北へと向かう列車の旅は、駅の離れ小島から始まるというわけだ。

そもそも「花嫁暖簾」とは、旧加賀藩（特に七尾）に伝わる、友禅仕立ての婚礼道具の一つである。花嫁の実家の家紋を配し、婚礼より一週間、嫁ぎ先の仏間入口に掛けられ、先祖代々の霊に実家の家紋をもって婚礼報告をするという（諸説あり）。このような風習にちなんだ二両編成の「花嫁のれん号」は、日本庭園の飛び石をイメージした通路の一号車と、流水をイメージした通路の二号車からなる。一号車は、木製格子で仕切られた八つの半個室に分かれ、桜梅の間、鉄線の間、菊の間と、それぞれのテーマにちなんだ友禅のオールドコレクションが施されている（**図3**）。私が乗車したイベント車両二号車は、四〇〇年の歴史を誇る金沢金箔装飾の伝統的な図柄が、壁にも天井にも描かれているせいか、絢爛豪華な重箱の中

図1　朱色と黒の「花嫁のれん号」。菊をはじめとする秋の図柄が、前方に配されている。

図2　「花嫁のれん号」ヘッドマーク。加賀水引をモティーフとする。

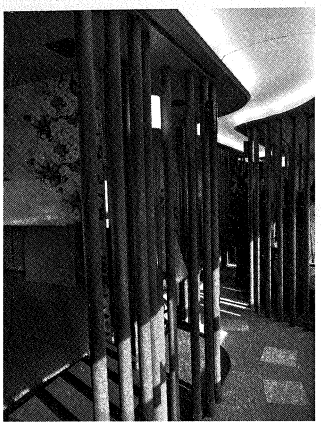


図3　木製格子の半個室。座席の背もたれ付近には、各室の名にちなんだ友禅の図柄（1号車）。

に迷い込んだ気分になる（**図4**）。紅色の生地に背面が木製格子の椅子たちが整然と並ぶさまは、まるで重箱の中の和菓子のようだ。

「女性の幸せを願う」をキャッチフレーズとするこの列車の乗客には、女性観光客と鉄道マニアが多い。どちらでもある私のテーブルに、金沢を出発して間もなく、七尾出身のパティシエ辻口博哲氏監修「花嫁のれんスィーツセット」の朱色の箱が運ばれた。ランチョンマットも紙コップも箸袋もすべて朱色。それが日の光に照らされて「漆？」と錯覚してしまうほど、この豪華列車そのものが、旅の非日常を演出していた。途中の停車駅羽咋（はくい）は、能登半島UFOの町といわれ、ホームには宇宙人キャラクター「サンダーくん」が、記念撮影用にスタンバイしている。加賀の伝統美を体現した車両と、ちょっぴり昭和を感じさせる宇宙人との記念撮影も乙なものである。続いて七尾に停車し、定刻通り一一時三七分に和倉温泉に到着した「花嫁のれん一号」は、そのまま折り返して、一二時七分和倉温泉発「花嫁のれん二号」金沢行きとなる。降り立ったホームは、この「走る重箱」をとり囲む、撮り鉄と乗り鉄でにぎやかだった。

さて次は、能登半島をさらに北へと向かう観光列車「のと里山里海号」の出番だ。日本海ブルーを基調とし、えんじのラインで大地の恵みを表した「のと里山里海号」は、七尾駅―穴水駅間を運行する観光列車であり、途中の和倉温泉から穴水までが、のと鉄道の管轄である（**図5図6**）。里山をイメージしたオレンジ色の座席を配する里山車両NT-三〇一と、里海をイメージしたブルーの座席の里海車両NT-三〇二の二両編成で、車内は、能登の伝統工芸と大正ロマンあふれる「庶民の座敷」といった雰囲気だ。座席の模様はノトキリシマツツジ。ヘッドカバーは能登上布。座席間のパーテーションは繊細な組子細工でできており、里山里海の素朴な図柄の輪島塗プレートが、表裏合わせて二二枚はめ込まれている（**図7図8**）。一二時二二分に和倉温泉を出発した「のと里山里海三号」は、通常列車が四〇分で走り抜ける能登の内海沿いを、時速約四〇キロ、約七〇分かけてゆったりと北上する。途中の能登中島駅で、昭和六一年に引退した郵便列車見学のため停車し、七尾湾、穴水湾（七尾北湾）を右手に眺めながら、最後にトンネルを抜け、一三時三五分定刻通り穴水駅に到着した。

図6 「のと里山里海号」ヘッドマーク。里山と里海とノトキリシマツツジ。

図5 日本海ブルーにえんじのラインの「のと里山里海号」。

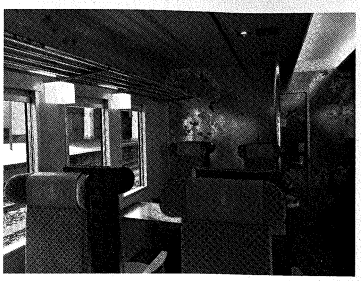


図4 壁や天井には、金箔細工をイメージした金色に、桜をはじめとする春の図柄が配されている（2号車）。

ブルーの里海車両に乗車したら、オレンジの里山車両にも乗ってみたいとは、鉄道マニアのおさえられない衝動といってもよいだろう。遠藤関の出身地であるこの穴水から折り返し七尾行きとなる、一四時一四分発「のと里山里海四号」に乗車してすぐ、往路ではまだ曇り加減だった能登の空が、吹雪へと一変した。この里山車両の一部は、ハイデッカー式展望車両となっており、海側車窓に向かった階段式の形状となっている。窓に向かったカウンター席の背後の一段高いところに、馬蹄形に配されたテーブル席が設えてあるのは、あの「トワイライトエクスプレス」のサロンカーと同じであった。

さて、南下する復路、左手に広がる能登の内海は、波が穏やかなため女海と呼ばれる。アテンダントのガイドによれば、穴水湾に浮かぶ木製の四角錐は、「鰯待ち櫓（ほらやぐら）」というのだそうだ。丸太四（五）本を浅瀬に立て、上部を縄でくくって登り梯子をかけたもので、高さは約八メートル。櫓の上では「鰯待ちばあさん」の人形が沖を眺めている。海豚も泳ぐ七尾湾に突き出た小さな半島には、『となりのトトロ』を思わせる、こんもりとした鎮守の森の鹿島神社が鎮座する。昭和七年に植樹されたソメイヨシノに囲まれ、別名「能登さくら駅」とも呼ばれる能登加島駅を通過したとき、『千と千尋の神隠し』のレトロな列車の場面が不意に脳裏を過ぎった。そういえば、アニメ『花咲くいろは』[3]の舞台となった、湯乃鷺温泉最寄り駅「湯乃鷺駅」とは、のと鉄道の西岸駅がモデルとなっているそうだ。アニメファンの聖地巡礼に欠かせない実際の西岸駅には、「湯乃鷺駅」という駅名標の方が大きく掲げられていた。

里海風景から、黒く艶やかな「能登瓦」の家並みを抜けて上り坂となり、「踏ん張り綱」をつかって昔は上ったという里山へと滑り込んでいく。この列車名の元となった「能登の里山里海」とは、能登半島の四市五町[4]に広がる風景を指し、二〇一一年に国際連合食糧農業機関（FAO）より、日本初の「世界農業遺産」に認定された。対外的には、日本海に臨む輪島白米千枚田の夕暮れ時の風景が、一番知られているようだ。そういえばこの時期は、伝統行事「あえのこと」の真っ最中。収穫後の一二月五日に田の神を各家に迎え、耕作前の二月九日に再び田圃へと送り出す、奥能登に伝わる神へのおもてなしの儀式なのだという。車窓からの美しい眺めとガイドの名調子に、ちょっとしたノスタルジーが加わって、能登の美しい景観

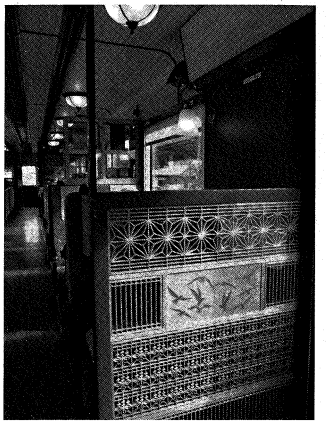


図7　里海車両の仕切りは、繊細な格子細工と海にちなんだ図柄の輪島塗（白塗）。

図8　里山車両の仕切りは、繊細な格子細工と山にちなんだ図柄の輪島塗（黒塗）。

の背後に見え隠れする、此岸と彼岸とのコミュニケーションとも見なしうる人々の「生きざま」に、少しは触れられたような気がした。「ほんならね、また来てくらいね、まっとんね」という能登弁と、「大野様ご乗車ありがとうございました」という名指しでのお見送りを受けて、一五時一七分に七尾駅に降り立った。

さてここからは、「伝統」よりも「今」を感じる時間となる。一五時二七分七尾発「能登かがり火八号」で金沢へ向かい、定刻通り一六時二九分到着。金沢二一世紀美術館の現代アート「スイミング・プール」（レアンドロ・エルリヒ作）を見学し、一九時三九分金沢発北陸新幹線「かがやき五一六号」東京行きに乗車。乗り鉄の疲れを癒してくれたのは、グランクラスの広々とした革張りの椅子と赤ワインだった。さて、今回の北陸の旅で体験した「美」の最たるものは何かと問われれば、「のと里山里海四号」チーフアテンダントの心こもった「美声」のおもてなしだったと答えるだろう。

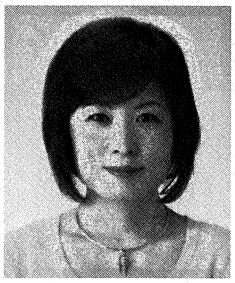
注

1　拙文「寝台特急トラベルダイアリー―札幌駅四番線から三度乗車した女―」（二〇一五年四月一日、「東洋通信」第五二巻第一号〔四月号〕、二二九頁）参照のこと。

2　JRグループ、北陸三県、北陸経済連合会共催のディスティネーションキャンペーン「Japanese Beauty Hokuriku～日本の美は、北陸にあり」（二〇一五年一〇～一二月）を引き継いだ、JR東日本、J東海、JR西日本共催のキャンペーン（二〇一六年一～三月）。

3　P. A. WORKS 制作のアニメーションで、関東では東京メトロポリタンテレヴィジョン（TOKYO MX）にて、二〇一一年四月から九月まで放映された。石川県の旅館を舞台とする、高校生松前緒花の（精神的）成長を描いた作品である。

4　七尾市、輪島市、珠洲市、羽咋市、志賀町、宝達志水町、中能登町、穴水町、能登町のこと。



大野　寿子
おおの　ひさこ

文学部教授
専攻　ドイツ文学
出身　福岡県